

乙訓文化

88号

2017年7月31日

発行：乙訓の文化遺産を守る会

目次

総会・六〇回・六一回・六二回・六三回

歴史文化教室の報告

「京都ざらい」というけれど・堀内和明

【本の紹介】

「地名が語る京都の歴史」・・・後藤国彦

総会・講演会のあんない（9月9日）

「長岡京発掘の思い出」

西川 幸治 先生（京都大学名誉教授）

「長岡京の道路と轍」

木村 泰彦 さん（長岡京市埋文財センター）

守る会は創立五〇年をむかえ、六月に記念講演会をおこないました。九月十八日には、向日市の寺戸町公民館で、二〇一六年度の総会をおこないました。

創立のころをふりかえるなかで、五〇年前の長岡京の発掘にさいして発見された轍（わだち）の複製模型―都づくりにならずさわった人たちの足あとや荷車の車輪のあと（現在は山城郷土資料館所蔵）をぜひ都のあったこの地で公開しよう、という声がおこりました。往時の調査・研究の足あとをさぐり、都づくりの歴史をまなびました。おふたりの先生に、「長岡京跡の轍（わだち）」をテーマに記念講演をしていただきました。



榎木先生・西川先生・都出先生・木村さん
講演は会誌『乙訓文化遺産』22号で紹介します

六〇回歴史文化教室 12月3日

国史跡・乙訓古墳群をあるく

① ―大山崎町〜長岡京市―

乙訓地域の古墳が、“古墳群”として国史跡に指定されました。乙訓の文化遺産を守る会は、創立以来乙訓地域の古墳の保存運動にもとりくんできましたが、今回の指定は画期的なものと思われ評価しています。今回の指定を機に、あらためて乙訓地域の古墳の歴史について学ぶとともに、遺跡の現状を確認し、その保存や活用の方についても考えて行きたいと思えます。乙訓2市1町で史跡指定された古墳を何回かのシリーズで見学したいと思えます。今回はその第一回として大山崎町〜長岡京のコースをあるきました。

案内・角 早季子 さん（大山崎町教育委員会）

コース・JR「長岡京駅」・恵解山古墳・・・中

山修一記念館・・・境野古墳／御坊塚・・・

「西山天王山」駅（解散）（オプション）・・・

小倉神社（鳥居前古墳遠望）

【アンケート】

(1) 今日の「乙訓古墳群をあるく」は、いかがでしたか。(見学先、説明の内容、理解度、行程、募集の方法など)

・子どもの頃身近に見ていた塚や古墳が国の史跡に指定されて、大変嬉しく思っています。復原された古墳の姿を詳しく見ることが出来て、あと2回の古墳めぐりにも期待しています。乙訓の古墳群では石室に入れたり、外から見られたいりするのではないのでしょうか。今日は都出先生はじめ御専門の発掘に関わった先生方が要所要所で説明して下さいましたので、とてもよかったです。



恵解山古墳にて (右・角さん、左・都出先生)

・見学先、説明内容ともよかったです。天気もよかったです。

・全体的に楽しかったです。勉強になった。

・大変有意義な一日でした。見学コースも大変よかったです。また、説明もよく分かり、理解する事も、私の理解度の範囲内に入っておりました。

・ありがとうございます。

・自分が住んでいる地域と近いので、参加しやすかったです。

(2) 各古墳についていかがでしたか

・以前の恵解山古墳を知っていましたので、復原された姿に驚きました。あと二つの古墳ははじめて訪れ、住宅開発の波などにもまれて、かうじてその姿を留めていることを知りました。

中山修一先生には西京高校在学中に地理の授業でご指導いただきました。いつも地理よりも長岡京の話によく脱線して、地図が出来た時には生徒たち希望者にくださいました。今も大切に持っています。先生の偉大さを母からも常々聞いていましたが、記念館を訪れて、一層その思いを強く致しました。

・境野古墳は大山崎町に住んでいたのに行っただけなのに、勉強になりました。

・実際に訪問して理解が深まりました。

・恵解山古墳の説明はよく分かった。鉄剣を収納したスペースの深さが三〇cmと浅かったのは驚きであった。中山修一記念館の説明は、まとまったものではなく、よく分からなかった。

・非常に参考になりました。

・恵解山古墳の姿が圧巻でした。説明が分かりやすかったです(岩崎様の説明)。

・恵解山古墳の復元方法について、斜面を草敷にされていますが、子供達に古墳のイメージに間違った情報を与えます。経済的には大変でしょうが石敷にして欲しい。

(3) 乙訓の文化遺産を守る会の活動について

ご意見をお聞かせください

・鳥居前古墳を小倉神社から望んで、間際まで開発が押し寄せている様子に、息を呑む思いをしました。あちこちでも同じような現象が起きていると思います。この度の乙訓古墳群が国史跡に指定されるまでには、当会の長年に亘る保存運動があつてこそだと思えます。末永く会が存続して、郷土を愛する市民を育てるためにも、若い方への呼びかけも重要だと思えます。

・息長く地道に活動されていることに敬意を表します。

六一回歴史文化教室（2月12日）

「乙訓地域の文化財の

調査をふりかえって」

おはなし… 松崎 俊郎 さん（向日市）

岩崎 誠 さん（長岡京市）

林 亨 さん（大山崎町）

中山修一先生が長岡京の発掘調査を始められて六〇年余、乙訓の文化遺産を守る会が活動をはじめて五〇年を経過しました。この間、乙訓二市一町の文化財調査の体制も整えられ、数多くの貴重な遺跡の調査・保存がすすめられてきました。



向日市：松崎さん



長岡京市：岩崎さん



大山崎町：林さん

今春退職された方々に集まっていたいただき、それぞれの思い出を語っていただき、今後の文化財の調査と保存にむけての課題などをはなしていただきました。

【感想】

・大変興味深いお話を聞かせていただき、有意義な時間をすごさせていただきました。ありがとうございます。

・三人の方から長い年月にわたる、本当に汗のじむ活動のあゆみをうかがい、この道を進む方々の地道なお仕事文化財を守っているのだと痛感しました。一市民として地域の文化財をこれからも大切にしていきたいと思いました。

・有意義なお話をありがとうございました。今後のご活躍を期待しています。

・今まで今回のような楽しく感動できた講演会はなかった。これからもこんな身近かで、わかりやすいお話を聞かせてください。ありがとうございます。

・三人のお話しを一日にまとめられたのが残念なくらい中身のこいものでした。資料もじっくり時間をかけて見たかったです。文化財の普及・啓発の取り組みも考えていかないと！

・三人の講師の方から体験談も聴かせていただき、手話通訳を通じてよく理解できました。ありがとうございました。

『乙訓文化遺産』『乙訓文化』への投稿のおねがい

会誌・会報の発行は、会のとりくみの大きな柱であり、貴重な財産です。歴史文化教室の講演記録をはじめ、会員のみならず方々の研究の交流の場であり、地域の文化財についてのエッセーや短信など、投稿をお願いします。

※長岡京市の古墳巡見の感想を記入していただく時間はありませんでした。参加された方の投稿をお願いします。

（事務局）

国史跡・乙訓古墳群をあるく

② ー長岡京市ー

国史跡に指定された乙訓古墳群をめぐる第二回目は、長岡京市域の古墳の探訪を行いました。案内・山下研さん・大高義寛さん（長岡京市教育委員会）

コース・阪急「長天」ー（舞塚）ー今里大塚ー七ツ塚古墳ー（長法寺南原古墳）ー光明寺（トイレ休憩）ー（芝古墳）ー井ノ内車塚ー井ノ内稻荷塚ー現地解散

【感想】

事務局の方々、行事計画おつかれさまでした。非常に良い企画でしたが、一日かけて歩く見学距離を半日で行ったので、疲れしました。半日で20000歩弱はハードでした。一回目は参加していないのでわかりませんが、三回目も同様の距離でしょうか。もう少し余裕があるとありがたいです。みんなで歩くという楽しいつばやきもあり、ひとりでは行きたくないところもいけるので、今後ともよろしく願います。3回目はどこか石室に入れるでしょうか？



今里車塚にて 参加者集合写真

おたより

『乙訓文化遺産』21号をうけとって

先日は会誌「乙訓文化遺産」第21号を送付いただきありがとうございます。会誌を涙ながらに読ませていただきました。

会誌を手にとった時、いつもと違い、ずしんと重たさを感じました。それは会誌のページ数が多

いだけではなく、充実した記事の内容と「乙訓文化遺産の会」の歴史だと思いました。（資料）「1989年守る会総会シンポの記録」のページを開くと、約27年前の1989年に長岡京市中央公民館で開かれた総会とシンポジウムで、中山先生や平先生らをはじめ、参加者の皆さんが真剣に乙訓地域の文化遺産を守るために議論されている姿がよみがえってきました（当日の様子を伝える写真がないのが残念です）。また、編集後記のページも冒頭の文章にも感激しました。「乙文50年のあゆみは乙訓地域の文化遺産の保存と活用の歴史でした。記念講演で井上満郎先生は「極端な話、もし乙文がなければ長岡京あるいは乙訓の文化遺産の有り様は（中略）もっと違った、極端な言い方ですが、ひどいものになっていた可能性があります。この言葉を胸に、今後も活動を続けたいと思っています。この文章が書けるのは、やはり五〇年間活動を続けてきた乙訓文化遺産を守る会でしか書けない、大きな誇りだと思います。乙訓の文化遺産を守りたいとの思い、今後も若い皆さんにもリレーしてもらいたいと思います。」

涙もろくなった田舎暮らしの中尾秀正

「ふるさと乙訓の歴史をまなぼう」
— 第3回 会員の研究発表会 —

守る会は会員ひとりひとりが主人公として、会
や地域のとりくみに参加してきました。その学習
の成果を会誌『乙訓文化遺産』や会報『乙訓文化』
に発表してきました。今回は3回目となる会員の
学習成果の発表と交流の機会をもちました。

発表：片山秀雄さん「富永屋の古文書をよむ」

井上喜雄さん「離宮八幡宮の日記をよむ」

大原治三さん「宝菩提院廃寺のおもいで」



片山さん



井上さん



大原さん

【感想】

- ・ 会員の発表会を今後もひき続きおねがいします。楽しみにしています
- ・ 富永屋の保存についての話に感心をもった。関係者の努力に敬意を表します。なんとか残してほしい文化財です。
- ・ 宝菩提院の話は非常に興味をもちました。
- ・ 大原氏のはなし、地域で守る文化遺産の訴えには迫力を感じました。森安氏・片山氏のコメントも圧巻！、行政・市民の協力！（鶴野）
- ・ 古文書に興味をもっていました。今日のお話、興味深くお聞きしました。
- ・ このような会合が日本全国で開催されているのだろうと思います。向日市においても、このような活動が途切れることなく続くようねがっています。

- ・ 江戸時代の富永屋さんに興味があったので参加しました。古文書部会の方々の研究の成果が楽しそうでした。一字一字読み進めていく中で、当時の暮らしの一端が垣間見えてきます

- ね。離宮八幡の社役人の日記からも、人々のもめ事の仲裁など、面白くお聞きしました。宝菩提院廃寺のお話しも大変面白かったです。地域の史跡を守って行くことの大切さを強くおもいました。(F・H)
- ・ 大山崎の事、富永屋の事、宝菩提院のこと、それぞれ時代の様子がわかり、いろいろプラスになりました。
- ・ 古文書の読み解き、説明を聞かせてもらい、少しずつ分かりました。①富永屋に宿帳がない、伊能忠敬の日記に投宿の記載がある、②離宮八幡の日記に、役所や裁判所の如き記録がある。全国で、世界でいろいろある文献には、夫々内容を表す別題・傍題をつけると、より理解が深まると思う。(吉武)
- ・ 宝菩提院跡について説明していただき、(地中遺構ではなく)きちつとした遺跡として保存してほしかった。残念です。



富永屋の会場風景

「京都ぎらい」といつけたと……

近年、京都ブームは異常な高まりである。世界一の観光地！というネット情報



もあつて、季節を問わず京都は外国人観光客で賑わい、風雅な情緒は甲高い外国語に打ち消されて騒然としている。ひとむかし前の京都を知る者や京都市民で、好感をもって京都を語る者はほとんどいなくなった。地元のひとつとに愛されない京都とは！？少し立ち止まってみる必要があるのでは……。

観光シーズンが近づくと、情報誌や婦人誌の多くが京都特集を組み、観光客の呼び込みを競う。最近では学者までが京都ブームの波に乗って、印税を稼ぐ手立てを講じるようになった。その最たるものが、井上章一の『京都ぎらい』（朝日新書）である。洛外の花園で生まれ嵯峨で育ち、宇治に住む井上氏が、洛中の人々から差別的言動を投げかけられてきたという個人体験にもとづき、その

要因をエッセー風に綴ったものである。

洛外に住みながら京都人と称するのはいかげなものか、とする京都人の「中華思想」を難じたものだが、これをもって京都ぎらいとは、いかにも井上氏らしい、パラドクスを生かした京都売り込みである。意外な発想から歴史や社会を読み解く伝統は、梅原猛（初代所長）以来の国際日本文化センターの伝統のようである。

ただ、洛中・洛外の区別は豊臣秀吉の京都改造（御土居によって洛中を圍繞）によるものであり、時の権力によって行政区画、地名表示は変転するものである。もちろん、京都には平安遷都以来の“千年の都”の伝統があり、井上氏もそれが基層にあつての京都人の奢りとみているのであろう。

筆者は京都、といっても旧国名で山城国愛宕（おたぎ）郡の生まれで、現在は京都市左京区と表示されている。左京区というからには平安京の左京に由来することはいうまでもないが、左京区は旧愛宕郡を抱き込んで、北は若狭国との国境にもほど近い久多（くた）に及ぶのである。だからといって、旧愛宕郡に属した久多や大原、岩倉の住民が京都市民と称してもさほどの違和感もない。それは、旧河内国錦部郡に住む我々が大阪府民と称し、旧和泉国大鳥郡の泉北ニュータウンの住民が堺市民と称するのと何ら変わらないので

ある。ではなぜ、京都だけが問題になるのか？それはやはり世界一の観光地にあつて、今なお洛中・洛外を問題とする特権意識（洛外者の被害意識と表裏一体の）が井上氏にもあるからでは……？！もちろん、近年の京都ブームとは無関係に、京都の概説書としてその歴史や名所・遺跡を精査した書籍も多い。古くは1962年刊の林屋辰三郎『京都』がよく知られているが、近年では2014年刊行の高橋昌明『京都（千年の都）の歴史』、そして昨年1月刊の高木博志等による『京都の歴史を歩く』と、一見ブームに便乗したかにもえる刊行が続いた。が、いずれも歴史学者によって、三者三様の視点で京都探訪が展開されていて、奥深い京都の歴史や情緒を味わうことができる。

以上の三点はいずれも岩波新書だが、昨年6月には京都の文理閣から、仁木宏をはじめ京都に造詣の深い学者を総動員して、『歴史家の案内する京都』が刊行された。読後、すぐにでも京都へ行ってみたいくなる京都案内書である。

※ 本稿は河内長野市の中世史研究者の知人の発行している地域誌『歴史と地域』より、著者の了解をえて転載させていただいた。高橋先生や仁木宏先生など、守る会の先生方の本の紹介もあります。

「地名が語る 京都の歴史」

糸井通浩・網本逸雄編 東京堂出版



「宇宙」という言葉は、英語の cosmos の訳語として使われるが、本来は「宇」が場所や空間を、「宙」が時間を著す。本書は、京都という「宇」場所について、その古代から近世までの各時代の「宙」時間で切って見せてくれる。京都は乙訓地区を含む京全域であり、時代は平安京以前から幕末から現代へまでで、六章32項目に分けている。12名の著者が500ページのボリュームで京の町を活写している。参考文献は巻末によると250以上あり、以外に有名無名の各時代の史料をふんだんに使用している。地名の由来が知ればその地がどんな場所であったかが分かり、地名の

離合集散が分かれば変遷が見えてくる。書名が示す通り、地名を知ることによって京の歴史が現れてくる。四条通を西行し松尾橋の手前で折れて桂川（大堰川）沿いに渡月橋まで行く堤防は、「粟原堤」と呼ばれる。粟は難読漢字でフシハラツツミと読む。藤原氏との関係がありそうであるが、実はフシは柴の古語でハラは詰め込んだ腹である。古代に柴を編んで垣として堤防にしたため名付けられたと看破している。

藤原京跡から出土した「乙訓」「弟国」と書かれた木簡を調査し、弟国の名は当時京都の葛野郡を兄とみて弟の国から名づけられたという通説や、また同じく「山代」「山背」と書かれたものから平城京の裏との説を紹介している。

平安京時代では、市内に残る染殿・近衛・大炊・少将井・神泉苑などの地名は、そこにそれらの施設があったことによることを述べている。大鏡にある百鬼夜行する「あはゝのつし」について、当時の多くの史料を渉猟して、大宮大路を南下した辺りと論証している。

鎌倉室町期では、座が解体し町が発展するにしたがって、里商人が「立ち売り」したことで、上立売・中立売・下立売の名前ができ、同業者が集まった商業名の木屋・麩屋・車屋・両替などができたとされている。

秀吉が聚楽第を作った時代では、州浜・新白水丸・山里・亀木・多門・天秤などの名は、それぞれ聚楽第の施設の名前であるとしている。

江戸時代では、鶴岡の豪商の妻清野が長期にわたって記した道中日記の興味深い話しを載せて京の町を説明し、地名の由来も述べている。

近世では、久御山にあった巨椋池に関して小倉の名が残り、中書島・向島・填島など島であったことの名を残している。

以上簡単に紹介したが、もちろん本文はもっと広く深く詳細に説明している。自分の住む地名の由来を知って歴史を知る、不思議な地名の由来を知って感動するなどのためには好書であろう。

（後藤 国彦）

山崎達雄さんが

循環学会の賞を授賞されました

前号会報で紹介した『ごみとトイレの近代誌』の著者の山崎さんが、28年度「廃棄物資源循環学会・著作賞」を授賞されました。若いころから、古文書部会に参加して、環境関係の資料をコツコツと収集され、研究を大成されてきました。この度の授賞おめでとうございます。「ゴミとウンチの山崎さん」などと言ってごめんなさい。（古文書子）

平成 29 年（2017）乙訓の文化遺産を守る会

総会および 講演会のあんない

と き：9月9日（土曜）13時30分～16時30分

会 場：長岡京市中央生涯学習センター 3階特別展示室

（JR長岡京駅前バンビオ一番館内）

総 会：2016年度のとまとめ／2017年度の方針

講 演：「乙訓古墳群の国史跡指定の意義」

古川 匠 さん（京都府教育委員会文化財保護課）



※ 会場で歴史文化教室（古墳巡見）の写真展示をおこないます

阪急の駅名（「長岡宮前」）の提案から

会報『乙訓文化』87号に阪急の駅名変更の提案（西向日町↓長岡宮前・東向日↓西国街道口）をさせてもらったところ、賛否さまざまのご意見をお寄せいただいた。この記事が京都新聞（1月26日付）の「凡語」にも紹介され、これを見た知人からも「見たよー」の連絡をいただき共感をえたようで、ちよつと嬉しい気分でもある。また、守る会の副会長の坂下さんが、阪急電車の担当の方に会報を送られ、この提案について照会していただいた。阪急の担当の方から、「現状では無理」との回答をいただいた。駅名変更は単に看板の付け替えでは済まない、全線にわたる大事業で、近年の「洛西口」駅や「西山天王山」駅開業の機会に連動していればとも思い、ちよつと悔やまれもする。

とまれ、今回の提案は守る会としての見解や要望ではなく、まったく個人的な思いつきの投稿記事である。単に「駅名変更のアイデア」としてではなく、乙訓二市一町の行政や市民が、「町おこし」を競うのではなく、「おとくに」地域として協力してとりくみを進めていってほしいという願いを述べたものである。教育・文化の施策は、行政

や担当者の「事業」としてのみでなく、広く市民の意見やアイデアを活かして取り組んでほしいとの願いを述べたものである。と同時に、守る会の会誌や会報への会員の方々の活発な投稿を期待しての「おねがい」でもある。（長谷川澄夫）

【編集後記】

くる日もくる日も「真夏日」「熱帯夜」、会員のみならず方にはお元気でしようか。昨秋会誌『乙訓文化遺産』21号（50周年特集）を発行して、ホッとしたのか、会報の発行が滞って申しわけありません。年末のつもりが、3月末に、5月末に、7月になってしまいました。歴史文化教室は「乙訓古墳群」の見学・現状確認の企画や、会員の発表会など、地道に着実に取り組んでいます。会報の発送をもって、総会のあんないとさせていただきます。総会・講演会へのご参加、および会誌・会報への投稿、よろしくお願ひします。」（は）

乙訓文化 88号

発行日 2017年（平成29）年7月31日

発行所 乙訓の文化遺産を守る会

事務局 長谷川澄夫 方

〒617-0002 京都府向日市寺戸町西野辺8

TEL 075-921-2054 / HP (<http://otubun.org>)

振替番号 00990081300084

年間会費 2000円